

対話が生まれる教員研修のデザイン —個別指導塾における教員研修の歴史と効果の検討—

藤森裕紀 (東京学芸大学大学院)

キーワード: 教員研修, 個別指導塾, 学習環境デザイン

問題と目的

藤森 (2019a) は自身が勤務する個別指導塾教室長とのアクティヴ・インタビュー (ジェイムズ & ジェイバー, 2004) を通じて塾の歴史の生成過程を記述した。これは藤森 (2019b) の教員同士が互いに相談し合える関係性の実践において欠けていた歴史 (ニューマン, 2019) の検討であったといえる。しかし、先の研究では当該塾の教員研修の歴史や効果は検討されていなかった。そこで、本研究では当該塾教員へのアクティヴ・インタビューにより得られたデータから、文化-歴史的活動理論 (エンゲストローム, 1999) を参考にして当該塾の教員研修の歴史的变化・運動を記述し、①学習環境デザインと②研修の効果の観点から検討することを目的とした。

方 法

2020 年 2 月 21 日、神奈川県内の個別指導塾にて筆者が当該塾の社会人教員 2 名に対して半構造化面接を実施した。得られたデータから逐語録を作成し、大谷 (2008, 2011) が開発した SCAT

(Steps for Coding and Theorization) を用いて分析を行った。なお、分析結果であるストーリーラインと理論的記述については筆者を含む教員 3 名の協議で作成した。

結果と考察

分析の結果、藤森 (2019b) の実践前後の教員研修に関するストーリーラインが得られた。

教員研修の学習環境デザイン

ストーリーラインによれば、研修内容の変更前後で、研修が塾内で担う役割が変化したことを示す記述が見られた。変更前の研修は「参加者が各々独立」しており、「対話へのリスクが高く」「競争的な場」と表現された。変更後の研修は「不安や疑問についての対話を通じて教員間の関係性を構築する交流の場」であり、「対話のリスクが低い」と表現された。以上の記述から、教員研修において、即興的な対話へのリスクは学習環境デザインと不可分な関係にある可能性が示唆された。

また、変更後の研修について「対話のリスクが低い」「気の置けない対話が可能」な場である一方で、「緊張感を一定程度高める場の設定」を促す記述が見られた。この記述は協働的な人間関係と「緊張感のない身内的な」人間関係を区別す

る必要性を示すものであると捉えられる。以上より、対話をするリスクの低い場のデザインには、適切な緊張感の設定も同時に求められることが推察される。

教員研修の効果

研修内容の変更前後で、教員同士が「関わることがない付き合い」から「関わり合うものの表面的で淡泊な付き合い」へと変化したことを示す記述が見られた。「付き合い」について、児童生徒や他教員との人間関係に関わる不満が日頃出てこないことへの違和感が指摘された。これは児童生徒に配慮した業務上不可欠な振る舞いであり、研修内容の変更前後の変化は教員同士の「TP0 をわきまえた」関わりの増加と解釈可能である。

以上より、教員同士が互いに相談し合える関係性を実践する教員研修のデザインは、業務上求められる日常的な教員同士の関わりを促す効果があると推察される。

教員研修についてのストーリーライン

内容変更前の教員研修は (中略) 参加者が各々独立した状態から意見を述べる競争的な場であり、(中略) 対話へのリスクが高く、意見の発しやすさの個人差が大きかった。

内容変更後の教員研修は、問題解決を目的とするのではなく、業務中に生じた不安や疑問についての対話を通じて教員間の関係性を構築する交流の場として設定されており、教員 A・B により対話のリスクが低いと評された。

気の置けない対話が可能な一方で、(中略) 教員研修である以上は緊張感をもって臨まなければならないという意見や、他者との関わりや業務への熱意により生じる正当な不満が日常的に表出されないことへの違和感が挙げられた。緊張感を一定程度高める場の設定をすることで教員の人間関係が緊張感のない身内的なものになってしまうことを回避する可能性がある。不満の表出については、TP0 をわきまえた関わり方として捉えられた。以上を踏まえ、教員の人間関係について、教員研修の内容変更前は教員同士が関わることがない淡泊な付き合いであり、変更後は教員同士が関わり合うものの表面的で淡泊な付き合いとなっている可能性が挙げられた。